特別寄稿

《ルーマニア》への道のり

「ルーマニア・ブカレスト日本人学校」への赴任に際して

苫小牧市立緑陵中学校　校長　時田平治

【略歴】

一九四九年　函館市生まれ
一九七一年　東京芸術大学修了
一九七三年　北海道教育大学函館分校卒業
　　洞爺・有珠・苫東・明倫中学校勤務
一九九三年　北海道教育委員会勤務
二〇〇二年　在ルーマニア日本国大使館付属
　　ブカレスト日本人学校勤務

一　はじめに

二〇〇二年三月十五日、文部科学省において当時の遠山文部科学大臣から直々の辞令交付を受け、十六日早朝、期待と不安を胸に成田国際空港を飛び立った。

二十数年前になるが、文部省短期海外派遣の視察研修でヨーロッパ各地を旅行している。

しかし、今回は単なる旅行ではなく、仕事となるとどうしても不安が先立ってしまうのはなぜだろう。

十二時間余りのフライトではあるが、さすがビジネスクラスである。座席はゆったりしているし、きめ細かなサービスはあり、旅はしごく快適である。しかし、次から次へと出てくる食事のおかげでお腹も閉口ぎみ、おそらくアルコールの飲み過ぎが原因であろうか。メニューに載っていた飲み物をすべていただいた報いか。そうこうするうちに、経由地であるフランクフルト国際空港に到着。ここで一夜を過ごすことになる。

二　Can you speaking?

目指すホテルは、空港から繋がった通路を5分ほど歩いたところにある。

そして、ホテルの大きいこと。名前は「ホテル・シェルトン」、当然、5つ星である。

ここまで来ればもう着いたも同じ、と安心したのが大間違い。

ホテルへのチェックインがままならない。

およそ三十分間程に及ぶ悪戦苦闘（なぜそうなったかは秘密である。読者諸氏の想像に任せよう）の末、無事?、部屋にゴールイン。

ようやく、人目をはばかることなくベッドに横たわることができた。

しかし、その時間は束の間の夢心地であったと記憶している。

一時間ほど眠ったろうか。窓の外には夕闇が迫ってきていた。おもむろにベッドから這い出てシャワールームへ、これがまた豪華絢爛。我が家のリビングルーム並みの広さがある。トイレ、シャワー、浴槽と別々になっている。

簡単にシャワーだけを浴びながら、旅の疲れと寝ぼけた顔を隠すようにした。

間もなく、夕食である。

レストランに入り、誘導されるがままにテーブルに座る。ここからが大変であった。

手渡されたメニューを見ながら、何を注文してよいのか、また、何の料理名が書かれているのかも理解できないまま、それらしい物を何とかオーダーした。（なぜ写真付きでないのか）

十分程も経ったろうか。待っている間、あちらこちらからの視線を何となく気にしながら、（自意識過剰）とにかく平静を装っていた。

ただ、注文した物がどんな物であろうかと運を天に任せる思いであった。

果たして、ボーイが運んできた物は口にできる物ではあったが、想像していた物とはまるで別物であった。

次の日になって分かったことだが、手渡されていた食事券は一六〇ユーロの金額であり、妻と二人で使用した金額は、僅か四一ユーロであ

った。

思えば、部屋から食堂へのエレベーターの壁には、特大のロブスター料理の写真が掲示されていたではないか。金額は十分に大丈夫であったはず。なぜ気が付かなかったのか。

食べ物の恨みは、この上ないものである。

部屋に戻り、手渡されていた食事券が当日一回限りであったことが分かると、悔しさは倍増してしまった。

『いつの日か、この恨み晴らさでか。』

三　いざブカレストへ

ホテルでの一夜を過ごし、気分を一新して前日に確認していた、目指すブカレストへの搭乗口に向かう。

僅か2時間足らずの飛行時間。機上からのルーマニア・オトペニ国際空港周辺の景観は、我が故郷、札幌の郊外と同じではないか。が然、安堵と期待の気持ちが沸いてきた。

空港での簡単なチェックを済ませ、出口に向かうと、何とそこには、大勢の日本人の方々の心温まる出迎えがあった。

その懐かしい日本人の優しくほほ笑む顔を見るや、成田を飛び立って以来続いてた一抹の不安も一瞬のうちに消え去ってしまった。

オトペニ空港からホテルまでのわずか三十分の道程、車窓から見る景色は、やはり異国情緒を感じさせるものであったが、市中心部に向かうにしたがい、大きな店舗が続き、創造していた以上に発展している姿に驚いたところであった。『百聞は一見に如かず』である。

我々を乗せた車が到着したのは、繁華街中央に位置する三星のホテルである。

しばらくの間、このホテルを仮住まいとして勤務することになる。

次の日、取り急ぎ日本大使館大使への表敬訪問をするとともに、ブカレスト日本人学校を見学した。

学校は、ホテルから車で数分の道程であり、近くには、フランスとそっくりの凱旋門、そしてオリンピック体操女子で優勝したコマネチ（ご存じの方は私と同年代のことでしょう。ルーマニアの英雄である。）が結婚式をあげた所で観光名所ともなっているカシン教会がある。その他、国立陸上競技場、ラグビー場、水泳競技場等が一角にかたまって建っている。

特に、国立陸上競技場は本校の体育時に使用しており、授業時には一緒にオリンピック選手が練習をしているのである。

春休み中ではあったが、数人の子供たちと職員が出迎えてくれた。

学校は、普通の民家を改造したものであり、一見して学校とは思えない造りである。それだけ一軒一軒が大邸宅であり、プールを設置できるだけの余地がある。もちろん部屋数も多く、職員室は勿論のこと、教室数も大丈夫である。

ルーマニアでは、かつて政策により、一軒家に住んでいた者はすべてアパートに移住させられたのである。一軒家に残ったのは、上級幹部の連中のみである。

一軒家を追われた住民は、八～十階建ての粗末な造りのアパートに移住することになる。

その際、犬、猫など家屋で飼っていたペットは野良となることを余儀なくされたのである。

私が赴任した頃は、街中を野良犬がかっ歩し

ているとともに、時には徒党を組んで縄張り争いをしており、恐ろしい一面があった。

赴任の際、狂犬病の予防注射を打っていたので安心はしていたが、君子危うきに近寄らずである。ちなみに、毎年被害者が出ている。

しかし、その野良犬たちは、見るからに血統書付の犬なのである。それもそのはず、ルーマニア人は、犬、猫などの動物が大好きであり、ほとんどの家庭で飼っていたようであった。それが、アパート政策により、家屋からやむなく放り出され、野良として生活するようになったのである。

そのようなことから、公園などにいる徒党を組まないおとなしい犬は、道行く人から可愛がられ、餌を貰って生活しているのである。

私も大の動物好きであるので、毛並みの良い犬を拝借しようかと思ったくらいである。

それでも、私が帰国するころになると、その血統書付の犬たちも血が混じり、その気品のある毛並みや顔つきは、面影を残す程度になってしまった。何時の世も可愛そうなのは犬、猫などの弱者である。

一週間ほど経ち、引継ぎを終えた前校長の帰国とともに、住まいはホテルから校長住宅へと移転し、いよいよブカレストでの本格的な生活が始まるのである。

四　ブカレストの生活

さて、住まいをホテルから一般住宅へと変化させ、ここが我が城と決めたものであった。

毎日の生活のリズムやスペースが、日本では味わえないほどのゆったりしたものであり、すこぶる満喫した気分をもったところである。

アパートではあるが、前述のようなものではなく、新たに建てられた二階建てである。しかも、一階部分は、フィリピン大使が居住する公館であり、二階部分が我が家である。出入り口の門には二十四時間体制で衛兵が詰めている。セキュリティーは最高級である。残念ながら写真は公開できないのであしからず。

小生、夜遅く多少酔い心地で帰宅した時などは緊張したものである。一回目の時は、衛兵に銃を突き付けられた。二回目からは、手土産を振る舞うなどして、媚びを売っておいたので安心できた。

とにかく、安全で安心して生活できるのは素晴らしいことである。

ところが、住んでみてはじめて分かるもので一週間もすると逃げ出したくなってしまった。

虫は出るが、水は出ない。家の大きいのは望むところではあったが、どうにも落ち着いた気分が出ない。自分の声が四方八方に残響し、一体誰と話をしているのか分からない。そのぐらい広いのです。しかし、古いんです。

さらに、一つの部屋は、何年も顧みられていなかったかのようにちらかり、そして、がらくたがその場所を占有していた。

五　新居を求めて

一大決心の時がきた。

さっそく、いたるところから借家の情報をかき集め、ブカレスト市内を駆け巡った。

およそ二十ほどの物件を見学したろうか。その中から心に留めたのが三件あり、その中で一番と考えたのが引越し二回目の我が家である。

しかし、当初は金額が折り合わず、あきらめかけていたが、そこは粘り勝ち。こちらの言い値にすこぶる近付いてきたところで手を打った

次なる問題は、入居の時期である。

前の家での暮らしはすでに二週間を過ぎようとしていた。このままでは、気持ちがすっきりとしないまま、新学期を迎えてしまう。ぜひとも新居からの通勤で、心新たに新学期を迎えたいものである。

時は四月五日、金曜日である。せっかちな性分は変わらない。思い立ったらフルスピードでゴー！である。

家主の方は難色を示したが、そこはそれ、粘り（あるいは現金か）がものを言う。

さっそく仮契約を済ませ、鍵をもらえば、もうこっちのものである。

次の日、六日、土曜日には引っ越しである。

トラックの手配をはじめ、お手伝いさんなどスタッフにはなんと御迷惑をおかけしたことやら、いつかお返しと思ってはいるのだが。

なにはさておき、八日、月曜日からの出勤、そして、九日の始業式、入学式をめでたく新居からの出勤で行うことができたのである。

ゆとりある気持ちで、式を迎えることは重要なことである。

六　新学期スタート

さあ、平成十四年度の始まりである。

四十の瞳と七人の侍、そして、七人の現地スタッフが繰り広げるブカレスト日本人学校の幕開けである。

始業式で初めて全児童生徒に対面し、挨拶を交わすとともに、教職員の校務分掌等を発表した。

続いて入学式である。在ルーマニア日本国特命全権大使御夫妻をはじめ、日本人会長、商工会長、運営委員会委員長並びに委員と、そうそうたる方々の御臨席を得、厳粛な雰囲気の中、無事に入学式を終えることができたのである。

（自己満足の域ではある）

七　おわりに

のどかな毎日を過ごしている。しかし暑い。赴任した三月末で気温二十五度、運動会が行われる六月は三十五度となる。

ルーマニアの緯度は、北海道稚内と同じであるにもかかわらず、内陸のためか気温はすこぶる高い。八月には四十度になることもある。しかし、湿度が低くからっとして快適である。

勤務を終え、帰宅してからのビールは、格別なものがある。何と言ってもグラス一杯のビールが、日本円で三十円程度である。同じくグラス一杯のジュースやコーラは五十円。そして何とグラス一杯の水が八十円の高値である。ビールの消費量拡大は、うなずけるところである。

また、ビールの銘柄は、国内で二十三種類ある。当然、我が家の冷蔵庫には二十三種類すべての銘柄を二本ずつ、その他、好みの三種類を常時二十本ずつ備蓄している。それでも一週間毎に仕入れる必要がある。（なぜか？）

その他、ワインも旨い。聞く所によるとフランス、イタリアでは、ルーマニアワインをモルトとして輸入し、販売しているとか。当然、我が家にはワインも備蓄している。

そのようなことから、我が家の冷蔵庫は、ビール用、ワイン用、肉・野菜用の三台。その他保存用の大型冷凍冷蔵庫一台を保有していた。何と豪勢なことか。

その他、メイドさんが二人、運転手が一人、車は外交官ナンバーを使用。日本では到底考えられない生活をさせてもらいました。当然、仕事はそれに見合った働きをしていた、かどうかは別の機会にて御紹介することにしよう。

日本・ルーマニア友好一〇〇周年の年に赴任し、今をときめく紀宮清子内親王殿下に謁見を許され、政・財・スポーツ界の方々ともお付き合いいただきました。この貴重な経験をもとに、今後一層の精進をしてまいる所存である。